

## オルセーのナビ派展 美の預言者たち —ささやきとざわめき

三菱一号館美術館（東京・丸の内）

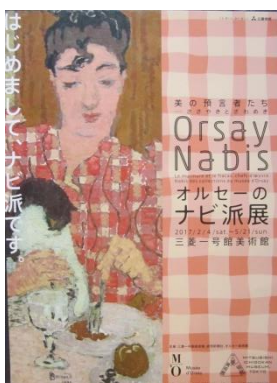
2017. 02. 04～05. 21

「オルセー美術館」は、パリにある 19 世紀美術専門の美術館で、印象派の画家の作品が数多く収蔵されているが、本展は、色面の組み合わせによる装飾的なスタイルを築く「ヘブライ語の預言者」を意味する「ナビ」をグループ名にして活動を行った若き芸術家グループである「ボナール、ヴイヤール、ドニ、セリュジェ、ヴァロットン」らを中心とする画家たちの作品の展示である。

彼らは、巨匠「ゴッコン」の影響を受けて、近代都市生活の諸相を平坦な色の面で表す装飾性と目に見えないものを描く内面性で、一見控えめで洗練された画面により 20 世紀美術に橋渡しする重要な役割を担っていた人たちである。

### <見どころ>

- ① オルセー美術館が誇る「ナビ派」コレクション「約 70 点」を一堂に展示。
- ② 国際的に評価の高まる「ナビ派」芸術を、本邦で初めて本格的に紹介。
- ③ 19 世紀末の「ナビ派」は 20 世紀美術を予兆する知られざる革新性に注目。



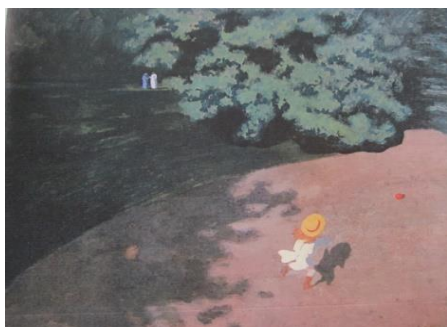
「ピエール・ボナール」(1867～1947) は、「ナビ派」の中でも最も日本美術の影響を強く受け、「超日本的なナビ」と呼ばれ、絵画の平面的、装飾的な構成には「セザンヌ」の影響と共に「日本絵画」の影響がかなり散見される。

画伯の極端に縦長画面の作品は、東洋の掛け軸の影響と思われ、人物やテーブルなどの主要なモチーフが画面の端で断ち切られた構図は、伝統的な西洋美術には見られないもので「浮世絵版画」の影響であるとされている。

ボナール：《格子柄のブラウス》（部分） 1892 年 油彩/カンヴァス

画家の妹をモデルに猫を抱いて食事をしている場面を描いた作品は、赤色のブラウスが装飾的で平面的な効果があり日本の格子柄の着物の影響が見られる。

ヴァロットン：《ボール》 1899 年 油彩/壁に貼った紙



高所から小さな女の子が赤いボールを追いかけて日向に飛び出してきた一瞬を捉え、向側では二人の女性が静かに立ち話をしている光景が描かれている。色彩は平坦ながら奥行を感じさせる独特の画面で、光りと影、動と静の対照が鮮やかで、女の子の大きな帽子と真っ白な服に人影が描かれて印象的である。